

京極読書新聞 <第18号>

発行日 平成22年11月 1日(月)
京極町生涯学習センター湧学館

平成22年度・京極町バスの旅

二人のあつい友情にふれた一日

今年は、有島武郎の小説「生れ出づる悩み」に描かれた二人、有島武郎と木田金次郎が出会ってから、ちょうど百年の年にあたります。毎年恒例、十月のバスによる文学散歩。今年は、木田金次郎が生涯をすごした町、岩内に向かいました。参加者は20名。

10月16日、天候は絶好の秋日和。夏の暑さがつづいた影響で、まだ紅葉は始まったばかりでしたが、パノラマラインから眺める岩内湾～積丹半島の美しさに見とれ、雷電海岸の荒々しい高波に驚き、かつて有島農場があった地に思いめぐらす、楽しい一日となりました。



▲ 二セコ町・有島記念館にて



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

2～4ページでは、バスの旅の行程を紹介します

後志 有島武郎

「生れ出ずる悩み」をめぐるバスの旅

1. 倶知安町 / 林芙美子文学碑

ニセコ町と岩内町をつなぐパノラマラインに入る前に、ちょっと寄り道。バスは比羅夫のスキー場公園にある「林芙美子文学碑」の前で止まります。

青き山なり
ニセコの山は
吾(わが)心また青々
心涼しむ

この碑文が彫られた盤面に羊蹄山が映るという、なかなかしやれた文学碑。林芙美子の「七つの燈(ともしび)」「田園日記」といった小説には、倶知安の町や半月湖などが描かれています。



京極から文学散歩 第6回 なぜ林芙美子は倶知安をめざしたのか

湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)



昭和9年5月、林芙美子は初めての北海道・樺太旅行に旅立ちます。その足どりが、とてもおもしろい。青函連絡船で北海道に入ると、まず林芙美子は函館を素通りしてしまうのです。そして、泊まった町が「倶知安」。ここを拠点にして、羊蹄山麓の町や遠く岩内方面まで足を伸ばすのです。後年、木田金次郎が好んで何度も描くことになる堀株(ホリカップ)の海を、林芙美子は訪ねたりしています。

なんと一週間ほど倶知安に滞在した後、ようやくのこと、札幌へ。でも、札幌、わずかに二日間。「私にはつまらない」の一言で、すぐさま樺太への旅にとりかかります。誰もが北海道といえば憧れる函館や札幌をほとんど無視。この不思議な足どりはどうしたことなのか？ 皆、わかりません。

「ああ、なるほど」と皆が気づいたのは、樺太からの帰り道です。当初、林芙美子は樺太旅行が終わったらまっすぐ東京に戻ると夫にも葉書で伝えていたのですが、滝川まで戻ってきたところで突然方向転換。根室本線に乗り換えます。そして、釧路へ。林芙美子は釧路の「小奴」を訪ねてゆくのです。

「ああ、啄木だったのか！」。ようやく、わかりました。「小奴」は啄木の歌集「一握の砂」に出てくる釧路の芸妓。そして、倶知安は同じく「一握の砂」の中の有名な歌「真夜中の／倶知安駅に下りゆきし／女の鬢の古き痕(きず)あと」の「倶知安」です。つまり、林芙美子は、啄木の北海道放浪の一年を辿っていたのです。



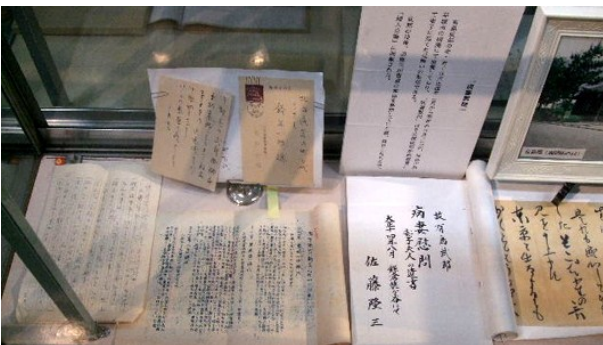
◀ 岩内町・木田金次郎美術館にて

2. 岩内町 / 木田金次郎美術館

木田金次郎の絵を精力的にコレクションする木田金次郎美術館。この時期は、木田と深い交流があった建築家・田上義也(たのうえ・よしや)の特別企画「田上義也・北方建築の種」展も開かれており、館内は、木田の絵と田上の建築作品が交互に並べられているという豪華さ。二人が生きた時代を鮮烈に表現する展示と、学芸員・岡部卓氏の丁寧な解説に魅せられ、大満足の一時間でした。

3. 岩内町郷土館

食事処・日本海で美味しいお昼をいただき、午後いちばんに向かったところは岩内町郷土館。親しみやすくりニューアルした館内を、館長・坂井弘治氏の名調子で案内してもらいました。岩内の町を訪れた有島武郎、映画「飢餓海峡」の数々の逸話、もっともとお話を聞いていたかったのですが、時間の都合もあるので、バスは雷電海岸へ。



◀この日の 見学のために 特別に 用意してくれた有島資料

4. 岩内町 / 有島武郎文学碑

「飢餓海峡」。犯人たちが強盗の計画を練ったのが、この雷電海岸から奥に4キロほど入った朝日温泉です。強盗の後、犯人たちが放った火が、その時接近していた洞爺丸台風の強風に乗って「岩内大火」が発生。岩内を出た犯人たちは、青函連絡船・洞爺丸の沈没事故で混乱する函館で救命ボートを盗み出し、それを使ってまんまと北海道を脱出…というのが水上勉の小説「飢餓海峡」なのですが、さもあらなと思わせるほどの雷電海岸の荒々しい風景でした。



ここに、有島武郎関連の文学碑が建っています。強い潮風のせいで、碑文はほとんど読みとれないくらいのボロボロ状態。ここには「物すさまじい朝焼けだ。誤まって海に落ち込んだ悪魔が、肉付きのいい右の肩だけを波の上に現している。…」という「生れ出づる悩み」の一節が彫られているのですが、読めない文字が一段と雰囲気盛り上げます。

しかし、雷電海岸といえば、有名なのは「弁慶の刀掛け岩」。この雷電岬で一休みすることになった義経一行。しかし、弁慶の刀があまりに大きく邪魔になった。そこで弁慶は大きな岩をひとひねり…というのが「刀掛け岩」の由来です。この伝説の場所を通ったのも何かの縁。ニセコの有島記念館に向かうバスの中で、村山功一先生による「義経伝説と北海道」の特別講義をいただきました。

5. ニセコ町 / 有島記念館

バスの旅、終点はニセコの有島武郎記念館。入館前、秋の最後の日差しを利用して庭で記念撮影。羊蹄山はもちろん、有島像や「カインの末裔」碑もしっかりフレームに入れて撮りました。(→表紙写真) 案内をお願いしていた館長さんが急病とのことで、解説映画と館内展示の見学だけになりましたが、ここに来るまでの木田美術館～岩内郷土館でしっかり有島武郎のレクチャーを受けていましたので、あとは実物をこの目で確認すればよいという状態だったのは幸運でした。コースが反対だったら、ちょっと苦労していたかもしれませんね。



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

